

15 精神病医アルブレヒト・フォン・

ローレツ

岡田靖雄

この題をみると、ローレツご本人が苦笑しそうである。わたしは第八九回日本医学史学会総会シンポジウムで「わが国の精神病学にたいする来日外人医学教師の貢献」の報告をし、またこのシンポジウムを本にまとめるとの蒲原宏会長のご要請により発表内容を論文にした。報告では『断訟医学』林笈筆記録に主としてとづき、ローレツの精神病学につき概観した。その後名古屋大学附属図書館医学部分館の田中英夫氏より『マイクロ・フィルム版 後藤新平文書』（雄松堂・東京、一九七五年）中の「東京府癲狂院建設計画案」というべきものを恵与された（この内容については田中論文に詳論されている）。この内容はきわめて具体的に詳細であり、都立松沢病院で病棟の大幅改造にとりくんだわたしにも、これだけのもの

はかけまいと一驚した。そして表題となったのである。

さて、この計画案は一八七九年（明治十二年）六月二七日づけでローレツから東京府癲狂院長長谷川泰にあてた、愛知県医学校用箋七〇丁にしるされた翻訳下書きとそれに対応する一九枚ほどの図面とである（図面の一部はローレツ自筆か）。ローレツ文書を後藤が訳した控えである（ただし字は後藤のものではない）。

上野公園内の養育院には一八七五年一〇月五日に狂人室が完成しており、一八七八年二月一八日にそれが増築された。東京府が癲狂院を設立することは一八七九年はじめに決定されていたろう。同年三月二〇日に開会された東京府会に、癲狂院費についての説明があった。そして七月二五日に養育院狂人室をかりて東京府病院（長谷川院長による癲狂院事業が開始された。一〇月一日に養育院が移転してその建て物が癲狂院にわたされ、一〇月二四日に長谷川が東京府癲狂院長を兼任することになった。しかし用地は文部省用地で手ぜまなために、東京府癲狂院は一八八一年八月三〇日に向ヶ岡の地（現東京大学農学部所在地）に移転した。養育院の建て物をつか

つたのは一時しのぎの緊急策であったので、癲狂院をあたらしく建設しようとしていた長谷川がローレツの意見をもとめたのである(ただし、この間の交渉をしめす文書はみいだせていない)。

ローレツの計画案は、「平穩処置(ノンレストライント・システム)」を基本線とし、広大な庭園を有する分棟式の癲狂院で、ローレツが適当とかがえる具体的設立箇所もあげ、また患者の「操業」(作業)については一一種目をあげ、看護人の資質・待遇につき詳説している。つけられている図面には、全体配置はもちろん、照明器具、暖房具、扉、鍵などの図まではいっている。

このローレツの案は、向ヶ岡の建築に、さらにそのあと一八八六年六月二日に移転した巢鴨駕籠町の癲狂院の設計に、部分的にいかされたようである。ただし、ローレツが基本線とした「ノンレストライント・システム」が実現し作業治療が大幅に展開されるのは、ずっとのち呉秀三院長の時代にはいつてからである。

ローレツは精神病学の講義はうけていない。だが、かれはヨーロッパ各国の癲狂院を見学し、また niederö-

sterreichische Landesirrenanstalt に一年ほど就職していた。その院長だった Ludwig Schlagel(一八二八—一八八五)は、各国の精神科病院を歴訪し、一八七三年に前記病院の院長となって無拘束治療(「ノンレストライント・システム」と作業治療とをすすめていた。『断訟医学』におけるかれの精神障碍分類は十分に整理されたものにはなっていない。しかしこの建築案にみる精神病医としてのかれの実際的知恵には目をみはるべきものがある。各地での見聞による知識と、シラーゲルのもとの経験とが、ローレツの実際的知恵をやしなつたのだろう。それにしてもすばらしい知恵である。

(精神科医療史研究会)